

# 修復家から見た絵画の見方Ⅲ

## ～ドラクロワとその時代～

講師 元ルーブル美術館修復員・絵画修復家 加賀 優記子

修復家という仕事をしていると、思わぬ形で当時の画家の生涯を深く追想する、という体験をすることがあります。描かれた絵の具に直接触れる、という行為を通して判ってくるさまざまな事柄から、修復家は美術史家とはまた一味違った絵画の見方を発見するものなのです。

今回は、私が実際に修復を手掛けたドラクロワ作品「サルダナパールの死」（ルーブル美術館蔵）やブルボン宮殿「王の間」の天井画などについて、ドラクロワの使用した絵画技法や作品修復の実際をお話します。また、こうした修復体験談の中に、ドラクロワの生きたフランス革命時代の興味深いエピソードも加え、美しいスライドをお見せしながら解説していきます。

修復とは一体どんな仕事なのか、一枚の絵から多くの歴史を知る面白さを実感していただけることと思います。

(講師・記)



加賀優記子 講師

### 〈講師紹介〉 かが・ゆきこ

1982年武蔵野美術短期大学油絵専攻科卒業。84年渡仏。パリ国立美術大学に学ぶ。86年ルーブル美術館修復家クリストフ・クシェジェンスキー氏に師事。クシェジェンスキー氏の弟子として、ルーブル美術館契約修復員となり、ルーブル宮殿天井画、コングルの間、ドラクロワ作サルダナパールの死、その他の修復作業に従事する。92～94年フランス国会議事堂ドラクロワ天井画他修復研修。90年「鎌倉美術修復工房」設立。ルノワール、モネ、ピカソ、レジェ、フジタ他日本の画家多数修復。IIC(THE INTERNATIONAL INSTITUTE FOR CONSERVATION)会員。